

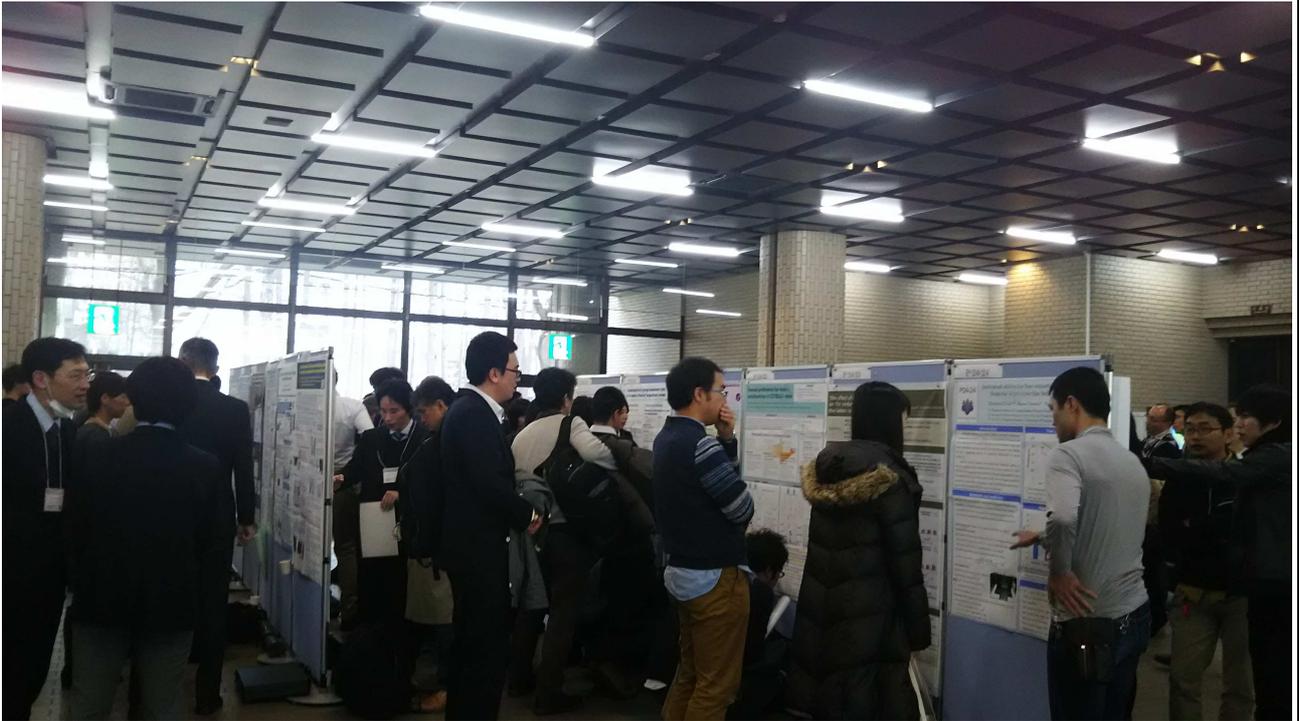
「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 月 日	
所属部局・職	霊長類研究所・修士課程学生
氏名	川口ゆり

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
北海道大学、日本
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
日本動物心理学会第 76 回大会参加
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 11 月 22 日 ~ 平成 26 年 11 月 27 日 (6 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
日本動物心理学会
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
日本動物心理学会第 76 回大会に参加し、以下の内容で口頭発表を行った。 タイトル：Do capuchin monkeys have the ability to discriminate age category from conspecific / heterospecific faces? 発表者：Yuri Kawaguchi, Hika kuroshima, Kazuo Fujita
日本動物心理学会は、2 年前、初めて発表を行った学会だ。国内学会では最も参加して面白いと感じる学会でもある。今回は、初めての学会でのオーラル発表であり、かつ英語だった。自身の発表に関しては、今回は比較的落ち着いて話せたと感じた。普段は早く話して短くなってしまいがちな発表時間も、ぴったり目標の時間にコントロールできた。
今まで研究的興味を共にする学外の知人を作るのが難しいと感じていた。しかし、今回はポスターセッション時に他大学の学生と研究内容についてたくさん話すことができ、そのうち何人かは来年の大会でまた話せるのではと思ったので、その点は収穫であった。ポスター発表を聴くというのも、今までそれほど得意ではなかった。聞き始めるタイミングを逃してしまうことも多かったため、何となくひとりでぶらぶらポスターを見る時間も長かった。しかし、今回は 2 日で 10 研究のポスター発表を聴くことができ、それぞれの発表者ともいつも以上にコミュニケーションがとれたので非常に満足であった。面白いと感じる発表がいくつもあった。
しかし、本大会の全体的な傾向としては、いままでより偏っているような印象を受けた。まず、対象種が鳥類、げっ歯類に偏っていると感じた。しかも古典的条件付けやクラシックなオペラント学習についての研究が多い印象を受けた。そのため、正直なところ過去二回の大会の方が個人的にはバラエティに富んでおり面白かったように感じた。
院生になったこともあり、本年度の大会では、自分が今後このコミュニティの中で研究者になっていくのだということをしばしば考えた。そのなかでどう「いい研究者」になるのか。やはり研究のオリジナルさ、面白さで勝負するしかないのだろうか、などと考えながら北海道大学を後にした。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



盛況のポスター会場



北海道大学のクラーク像

6. その他 (特記事項など)

本実習は PWS の支援を受けて行いました。ここにお礼申し上げます。